

夏目漱石

田山花袋君に答う



田山花袋君に答う



本月の「趣味」に田山花袋君が小生たやまかたいに関してこんな事を言われた。——「夏目漱石君はズーデルマンの『カツツエンステツヒ』を評して、そのますます序を逐おうて迫り来るがごとき点をひどく感服しておられる。氏の近作『三四郎』はこの筆法で往ゆくつもりだとか聞いている。しかし云々」

小生はいまだかつて『三四郎』をズーデルマンの筆法で書くと言った覚えなし。誰だれかの話し違ちがいか、花袋君の

まちがい  
聞違まちがだろう。疎忽そこつなものが花袋君の文を読むと、小生が  
ズーデルマンの真似まねでもしているようで聞苦しい。『三  
四郎』は拙作かも知れないが、模擬踏襲の作ではない。

花袋君は六年前にカツツエンステツヒを翻訳せられ  
て、翻訳の当時は非常に感服せられたが、今日から見  
ると、作為の痕迹こんせきばかりで、全篇作者の拵こしらえものにすぎ  
ないと貶へんせられた。褒貶ほうへんはもとより花袋君の自由である。  
しかし今日より六年後に、小生の趣味が現今の花袋君の  
趣味に達すると、達せざるとも、もとより小生の自由で  
ある。これも疎忽そこつものが読むと、花袋君と小生の嗜好しこうが

一直線の上において六年の相違があるように受取られるから、お断りを致しておきたい。

花袋君がカツツエンステツヒに心酔せられた時分、同書を独歩君に見せたら、拵らえものじゃないかと言って通読しなかつたと言って、いたく独歩君の眼識に敬服しておられる。花袋君が独歩君に敬服せらるるという意味を漱石が独歩君に敬服するという意味に解釈するものはないから、この点は安心である。

愚見によると、独歩君の作物は「巡査」を除くのほか、ことごとく拵えものである。（小生の読んだものについ

て言う) ただしズーデルマンのカッツエンステツヒより下手へたな拵えものである。花袋君の「蒲団ふとん」も拵えものである。「生」は「蒲団」ほど拵えておられない。その代り満谷国四郎君の「車夫の家」のような出来栄できばえである。拵えものを苦にせらるるよりも、活いきているとしか思えぬ人間や、自然としか思えぬ脚色を拵えるほうを苦心したら、どうだろう。拵らえた人間が活きているとしか思えなくって、拵らえた脚色が自然としか思えぬならば、拵えた作者は一種のクリエーターである。拵えたことを誇りと心得るほうが当然である。ただ下手でしかかも巧妙



に拵えた作物（例えばデューマのブラック・チューリツプのごときものは花袋君の御注意を待たずして駄目<sup>だめ</sup>である。同時にいくら糊細工<sup>のりざいく</sup>の臭味が少くても、すべての点において存在を認むるに足<sup>た</sup>らぬ事実や実際の人間を書くのは、同等の程度において駄目である。花袋君も御同感だろうと思う。

小生は小説を作る男である。そうして所々で悪口を言われる男である。自分が悪口を言われる口惜<sup>くや</sup>し紛<sup>まぎ</sup>れに他人の悪口を言うようにとられては、悪口の功力がないと心得て今日まで謹慎の意を表していた。しかし花袋君の

説を拝見して、ちよつと弁解する必要が生じたついでに、  
端なく独歩花袋両君の作物に妄評もうひようを加えたのは恐縮で  
ある。

小生は日本の文芸雑誌をことごとく通読する余裕と勇  
気に乏しいものである。現に花袋君の主宰しておられる  
「文章世界」のごときも拝見しておらん。向後花袋君お  
よびその他の諸君の高説に対して、一々御答弁を致す機  
会を逸するかもしれない。その時漱石は花袋君およびそ  
の他の諸君の高説に御答弁ができかねるほど感服したな  
と誤解する疎忽ものがあると困る。序ついでをもつて必ずし

もしからざる旨をあらかじめ天下に広告しておく。

(明治四一・一一・七『国民新聞』)



日本文学電子図書館

---

田山花袋君に答う

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 6 卷」角川書店  
昭和42年7月30日 5版発行

---

日本文学電子図書館